要　旨

中学生における自傷行為の経験率、性差、学年差と心理社会的要因

近年、中学校ではリストカット等の自傷行為が生徒たちの間に目立ち始め、学校現場でも大きな問題の一つとなっている。しかし、日本の中学生を対象に自傷行為の経験率を調査した研究は、まだ数少ない。そこで本研究では、「殴打」「切る」「彫る」「火傷」による４種類の自傷行為を取り上げて調査し、それらの経験率、性差や学年差を明らかにし、自傷行為と親子関係や精神的健康度、敵意的攻撃性という心理社会的要因との関連を検討した。次いで、一人が何種類の自傷行為を行っているかをカテゴリー化した「種類数別」における経験率、性差や学年差も検討し、心理社会的な要因との関連を明らかにした。さらに、「また、自傷行為をするかもしれない」という気持ちの「再度の自傷懸念」と自傷後の感情との関連の検討、ピアスの経験率、性差や学年差の検討、およびピアスと自傷行為との関連についても検討を行った。本研究の調査対象者は、神奈川県内公立中学校１校の生徒 475 名である。

自傷行為別の経験率は、「殴打による行為」では男子 43.2%、女子 35.1%、「切る行為」は男子 11.2%、女子 15.3%、「彫る行為」は男子 4.0%、女子 4.5%、「火傷による行為」は男子 2.0%、女子 3.1%であった。すべての行為に性差は認められなかったが、「殴打」、「彫る」行為において学年差が認められた。多重ロジスティック回帰分析により心理社会的要因との関連を検討した結果、全ての自傷行為に共通して有意な関連が認められたのは、親子の信頼感であった。「種類数別」の分布は、「行為なし」が男子 50.6%、女子 57.7%であり、「１種類」は男子 39.1%、女子 26.4%、「２種類以上」は男子 10.3%、女子 15.9%であった。種類数別による性差は認められず、有意な学年差が認められた。「種類数別」と心理社会的要因の関連を、多項ロジスティック回帰分析を用いて分析した結果、「自傷行為なし」を基準(1.0)にして考えると、「１種類」の自傷行為を行うリスクの増大が示された要因は、GHQ、いらだち（敵意的攻撃性尺度の下位尺度）であり、女性は減少させる要因であった。「2 種類以上」の自傷行為を行うリスクの増大要因は、GHQ、いらだちであり、減少させる要因は、親子の信頼感、敵意（敵意的攻撃性尺度の下位尺度）であった。また、「再度の自傷懸念」と有意な関連が認められた自傷後の感情は、「楽になった」と「後悔した」であった。さらに、耳たぶピアスの経験率は男子 2.0%，女子 10.2%であり、有意な性差を認めたが、学年差は有意ではなかった。多重ロジスティック回帰分析によりピアス経験と自傷行為の関連を検討した結果、ピアス経験と有意であった自傷行為は、「火傷による行為」のみであった。

以上の結果から、親子関係や精神的健康度は、自傷行為に関連する心理社会的要因であることが明らかになった。また、2 種類以上の自傷行為を行っている者は、1 種類の者よりもさらに親子関係の良好さや精神的健康度は低いことが明らかになった。さらに、自傷後に「楽になった」と感じている者は、自傷行為を繰り返し、「後悔した」と感じている者は、再度の自傷懸念は低くなることが示された。

自傷行為は、親子関係が関与していることが示唆され、今後は、家庭環境の背景要因をより詳細に調査していくことも意義があると思われる。また、養護教諭として、それらを高めるための有効で可能な支援についても検討していくことが重要であろう。

Key words：自傷行為、中学生、心理社会的要因、親子関係、ピアス